《論　文》

『紅楼夢』の文体的特徴
—宴席での表現を中心に—

池　間　里代子

The Characteristic Literary Style of *Dream of the Red Chamber*
—Laying Stress on Expression at a Banquet—

RIYOKO IKEMA

キーワード
宴席（Banquet），掛け言葉（Paronomasia），暗喩（Metaphor），罵語（Abusive language），反秩序（Anti-order）

はじめに

18世紀中葉，曹霑によって書かれ高鄂が補作したと言われる小説『紅楼夢』には様々な宴席シーンが登場する。しかし，これまでに宴席について考察したものは杨和《盛席华筵终散场》[1]（前80回に登場する宴席について分析），木村春子「『紅楼夢』に見る清朝貴族の食生活」[2]（120回にわたり特徴的な料理や飲み物の考察），齋藤喜代子『《紅楼夢》の宴（うたげ）について』[3]（宴席の意義と「盛筵必散」について論考）が触れているにすぎない。本稿では『紅楼夢』の文体的特徴を探る手段の一つとして，宴席での表現を取り上げ考察するものである。その理由は，宴席は非日常的活動であり，その中にこそ普段は現われにくい表現が出てくることが期待されるからである。[4] とりわけ他人が宴席に入ることにより緊張が生まれ反秩序が顔を覗かせると，登場人物が思わず口にする本音に文体的特徴が現われると考えられる。

考察に当たりポイントを1.「宴席料理」2.「酒令」3.「作法」にしぼり，対照分析として日常の食事シーンを取り上げる。また，資料として末尾に「紅楼夢に見える宴席」を付した。

『紅楼夢』には合わせて74回の宴席シーンが出てくる。フォーマルな宴席もあれば誕生会などの内輪の宴席もある。しかし，元春（主人公の姉，宮中で貴妃になった）の帰省について催された宴席はおそらく豪華絢爛だったと思われるが，曹霑の筆は止まっている。わずかに「正殿へ到着なさると，無礼講をさしゆるすとのご沙汰がくだり，一同席について盛大な御宴がはじまりました。」[5] が見えるだけだ。その理由は宮中に関わるものとして自粛したものかも知れないし，あるいは元春帰省が何らかの理由で物語の本筋から外れたとも考えられる。実際に元春は『紅楼夢』においてその日常の詳細がほとんど描かれていない。

テキストは人民文学出版社『紅楼夢』上・下（1982年），訳は平凡社 伊藤漱平『紅楼夢』上・中・下（1973 年）に拠った。

1．宴席料理をめぐって

1－1．貴族の宴席料理—「ハトの卵」と「茄子の料理」

きらびやかな宴席に初めて列なる劉ばあさん（百姓で，かつてお屋敷と交際があった縁で経

済的援助を求めに来た）が，珍しい料理に驚く場面。

①「這裡的雞兒也俊，下的這蛋也小巧，怪俊的。我且**肏**攘一個。」（第40回）
「お屋敷では鶏までが器量よしだと見え，産んだこの卵の小作りながらも立派なこと。ためしに一つ腹につめこんでみとうなりましたわい。」

作者は劉ばあさんを登場させることで，お屋敷の様子や貴族の衣装・食べ物などを読者に自然な形で説明することができた。①ではスープの中に入っているハトの卵について話している。この後わざと使いにくい箸をあてがわれた劉ばあさんが，いざハトの卵をはさんで食べようとするとツルツル滑って転がるばかり，それを皆が大笑いするシーンに続く（「3－2．箸」）。実はハトの卵は「見るだけ」のものであり，それを知らない劉ばあさんは何としてもはさもうとしたが失敗し，皆のいい笑い物になったのだ。[6]「**肏**」は「交合する，性交する」という意味で，『紅楼夢』ではこの他に5例見える。

第12回「瑞大叔要**肏**我**呢**。（瑞さんがわたしをつかまえて変なまねをしかけるんだよ！）」[7]
第16回「原來你這蹄子**肏**鬼。（なんと，このおちゃっぴいさんの仕組んだ狂言だったの。）」[8]
第43回「我說你**肏**鬼**呢**。（あなたは一芝居打ちましたね。）」[9]
第46回「又要**肏**鬼吊猴的。（お寝小便でもひっかけられたのではかなわないしね。）」[10]
第75回「再**肏**攘下黄湯去（このうえ気狂い水をあおらせた日には）」[11]

ふだんは「**肏**」という言葉を使うにはためらいがあろうが，『紅楼夢』では「**肏**鬼」という罵語が3例観察される。第40回・第75回の用例が「つめこむ・あおる」で，飲食物をグイグイ飲み食いするという意味である。

劉ばあさんの表現はハトの卵にまつわるせいで「**肏**蛋（どじをふむ・だめになる・バカ）」を連想させ，農民ゆえに上品さが欠けておりフォーマルな宴席での会話に甚だふさわしくない。作者は宴席に劉ばあさんが入ったことにより起こった反秩序を，俗語によって表現した。

②「別哄我了，茄子**跑**出來這箇味兒來了，我們也不用種糧食，只種茄子了。」（第41回）
「婆めをたぶらかさないでくださいましよ。茄子にこんなお味がいたしますものか，それなら，わたくしどもも穀物なんぞつくることはいりませぬわい，茄子ばかりつくりましょうものを。」

「茄胙」[12]という名の茄子の料理に驚く場面。王熙鳳の説明によると「四，五月時分の新茄子ばかりもぎりまして，皮とわたをそっくり取りますの。いい身のところだけ残し，毛筋ほどの千本にして，陽なたで乾し上げます。それから肉のついた牝鶏を一羽使って，とろ火でおだしをとり，いまの茄子の千本をその鶏のおだしを入れた蒸籠で蒸し上げて味をしませ，また取り出して陽なた乾しにしますの。こんな手順で九遍蒸しては陽なたで乾かせば，シャキシャキに乾し上がること請け合い。それをこんどは瀬戸物の壺につめて，ぴっしり目張りをしてしまうのですわ。いただく段になったら，一皿分ずつ出して，炒めた鶏瓜子（雉・鶏の賽の目に切った肉）と和えたらよろしいの」[13]となり，貴族家庭で作られた手の込んだ料理であることが窺える。

なお，他の版本では「茄鯗（乾し魚）」とあり，その製法は「採りたての茄子の皮を剥ぎ，きれいな身だけとり，細釘のように切り，鶏の油でいためる。別に鶏の乾肉・香菌（しいたけ）・新筍・麻菇（きのこ）・五香豆腐乾子（かやく入りの乾豆腐）・種々の乾果類を皆細切りにし，合わせて鶏のスープで煮，乾かす。つい

で香油（胡麻油）でサッと揚げ，酒糟と油とを混ぜ，瓶に入れて密閉する。食べる時には炒めた鶏爪子でかきまぜれば宜しい。」とある。[14] 後者の作り方に沿って現在北京の来今雨軒では「紅楼菜」としてメニューに入れている。やはり「茄鯗」という名であり，これは茄子にもかかわらず「魚」を含む文字を使用している一種の言葉遊びであろう。

さて，茄子には日本語にも「ぼけ茄子」「おたんこ茄子」などの罵語があるが[15]，現代中国語にも「茄子黄瓜一起数（味噌も糞もいっしょくた）」などという言い方がある。そして，恐らく茄子には男性器の暗喩があり，王熙鳳と劉ばあさんのやりとりで「茄子」が連発されているシーンは卑猥な感じを与えているのだろう。その場には前後の文脈から宝玉・黛玉・宝釵・湘雲らの年少者もいたはずであるが，「茄鯗」の場面では全く口を挟んでいない。その空白からも卑猥な会話であったと推測することができる。

そして，酔って踊りだした劉ばあさんを評して林黛玉が「どうでしょ，当節では牛がただの一匹ですものね」[16] と言い，「劉liú」と「牛niú」との双関語を用いて劉ばあさんをあてこすった。双関語とはいわゆる「掛け言葉」のことで，ここでは姓の「劉」と「牛」とが子音違いで同母音・同声調であることから「劉ばあさんは牛のようだ」と言っている。「牛」には図体が大きい・のろい・頑固などの意味を持ち，「牛鼻子老道（面の皮の厚いやつ・海千山千）」「牛**驥**同皂（牛と駿馬とを同じ馬槽で飼う→賢愚をごっちゃにする・玉石混交）」のことわざにもあるように「愚」を暗喩する。『紅楼夢』に登場する人物名はほとんどが双関語によって何かを暗示しているが，この宴席シーンでの林黛玉の暴露―いにしえの聖人が拍子に合わせて石の楽器を打ったならば，百獣がそれにつれて舞うようにさせたい，と言ったのに，ここには牛しかいない―は見事な皮肉であった。

1－2．「蟹宴」―無礼講

「二**奶奶**來搶**螃**蟹喫，平兒惱了，抹了他主子一臉的**螃**蟹黄子。主子奴才打架**呢**。」（第38回）

「若奥様（王熙鳳）が割りこんでいらして蟹をあがったものですから，その平児（王熙鳳の女中であり，王熙鳳の夫の側室でもある）が腹を立て，現在のご主人（王熙鳳）のお顔一面に蟹の黄身をなすりつけました。それでいま，ご主人と召使とのあいだで，すったもんだのさいちゅうでございます。」

表面的には無礼講の蟹宴で大騒ぎをしているように見えるが，「**螃**蟹＝横行覇道（非道横暴なことをする・のさばる）」が王熙鳳を暗示し，賈蓮（夫）の側室である平児が彼と「河蟹＝和楷（仲むつまじい）」であるので「喫醋（焼き餅を焼く）」している，という構図があるのだ。蟹は身体を冷やすと言われており，バランスを取るために「温」である酢をつけて食するのが常識である。そこで「喫醋（酢を食べる＝焼き餅を焼く）」という言葉が連想される。実際に王熙鳳は悋気で，賈蓮が尤二姐を妾とした際，表面的には良くしているように見せかけて，実際はいびり殺してしまった。平児にしても自分の腹心であると同時に夫の側室であるという事実を忘れることはなかった。

このように，一見すると単なる宴席に見えるが主従の心理戦が繰り広げられていることが分かる。

また，茄子のところと同様にその場には年少者も列席しているのだが，彼らの発言はやはり空白である。

2．酒令シーンについて

2－1．若君の教養―賈宝玉と薛蟠

主人公である賈宝玉の繊細な詞に対して，馬鹿君 薛蟠から発せられる無茶苦茶な言葉との対比。

賈寶玉：女兒悲，青春已大守空閨。女兒愁，

悔教夫婿覓封侯。女兒喜，對鏡晨妝顏色美。女兒樂，鞦韆架上春衫薄。（第28回）

賈宝玉「女は悲しむ―年がいってももらい手なしとは，女は愁える―わが夫の尻を叩いて悔いにけり，女は喜ぶ―惚れ惚れと鏡あいてに朝化粧，女は楽しむ―鞦韆漕ぎ春着まとって薄物の」

薛蟠：女兒悲，嫁了箇男人是烏龜。女兒愁，繡房**攛**出箇大馬猴。女兒喜，洞房花燭朝慵起。女兒樂，一根毛毛往裡戳。

薛蟠「女は悲しむ―嫁入りさきのご亭主が烏亀どんで，女は愁える―閨のうちに大猿一ぴきもぐりこみ，女は喜ぶ―洞房に朝迎えて起きとうもなし，女は楽しむ―一本のいちもつが首をばつっこむ」

作者は同じ酒令（宴会などで行なう遊び。ひとりが命令者になり，その命令にそむくと罰として酒を飲まされる）で作られた作品を対比することで，登場人物の形象を鮮やかに描いている。宝玉は題の「悲・愁・喜・楽」に即した詩語を即興で作ることができた半面，薛蟠は学問嫌いで遊び好きの性格そのままの作風である。しかも，しどろもどろで下品な表現満載であることが薛蟠の性格をよく描写していると言える。

第一句「烏龜（カメ）」は伊藤漱平の注にもあるように，忘八，つまり徳目（孝悌忠信礼義廉耻）の八つ目（耻）を忘れた恥知らずの人間の意。または女房を他人に寝取られた亭主の事で，スッポンをも指す。または八つの徳目すべてを忘れたもの，の意。一説には亀は人の目前でも交わるからとか，旧時賤者や妓家を一般のものと区別するため緑の頭巾をつけさせたことがあり，明代には妓楼の主人が碧緑巾をつけたとある。それが亀の頭を連想するからなど。[17] いずれにせよ，詩語に用いるには不適当である。

第二句では「大馬猴（大猿）」が閨にもぐり込む，とある。閨にもぐり込むのが人間ではなく獣であるはずがないので，これも荒唐無稽な句である。

第四句目が最もひどく「毛毛」という文字だが恐らく俗字だろう，これは俗語で男根を指す。この酒令は宴席での即興詞なので，特に起承転結である必要はないが，薛蟠がムチャクチャといえども第３句目が一応「転」になっている所が芸が細かい。

薛蟠の無教養丸出しのひどい歌は彼の人となりを描写していると同時に，宴席でわざと卑猥な文言を口にして盛り上げようとする，負のサービス精神なのかもしれないし，宴席のこととて酔っていたのかもしれない。実際に薛蟠は酔った上での殴打事件や殺人事件に関係しているので，これらの周囲を辟易させる表現はそれらの伏線であるとも言える。

２－２．王熙鳳の笑い話

お屋敷一番の口八丁である王熙鳳による爆笑シーン。歇後語を使用している。

「幾個人抬著箇房子大的炮仗往城外放去，…有一個性急的人等不得，便**偷**著拿香點著了。只聽“**噗**嚇”一聲，**眾**人哄然一笑都散了。著抬炮仗的人抱怨賣炮仗的杆的不結實，沒等放就散了。」「難道他本人沒聽見響?」「這本人原是聾子。」…「老祖宗也乏了，**咱**們也該“聾子放炮仗 — 散了”罷。」（第54回）

「何人かの者が家ほどもある大爆竹をかついで，郊外まで鳴らしに出かけました。…ところが気の短い人間もいればいたもので，待ちきれずにこっそり線香の火で点火してしまったのです。さあ，とたんに『パアン』と音がする。野次馬はどっと笑い，みな散り散りになってしまいました。その爆竹をかついでいた男のこぼすには，爆竹売りめが，火薬のこぼれどめをしっかりしておかないものだから，鳴らさぬうちに散り散りになってしもうた…」「まさか当人がその音を聞かなかったはずはないでしょ？」「いえ，なに，当人が

じつは聾だったので」…「お祖母さまもお疲れのご様子，わたくしどももの辺で『聾の爆竹鳴らし—散るばかり』もう散るといたしましては」

歇後語（俏皮話とも）は，しゃれ言葉の一種で，上の句で下の句の意味を推測させるもの。ここでは「聾の爆竹鳴らし—散るばかり」を用いて「もう遅いからお開きにしましょう」という意味である。このように王熙鳳は一つ物を言うにもユーモラスに，皆からの笑いを取ることに専心しており，その回転の速さがお婆様から可愛がられる所以である。と同時に，この笑い話は「散」という結論を回りくどく言っている

ために不吉な予感を覚えさせる。作者の創意はまさにそこであって，表面的には笑い話しで終わってはいるもののいずれは皆散り散りになってしまうのだ，という伏線である。

『紅楼夢』には歇後語がいくつか見え，それぞれが効果的に用いられている。例えば「爬灰的爬灰—污膝（媳）（灰の上をはうやつもはうやつだが：灰の上をはうと膝が汚れる—同音では，息子の嫁を犯す）。」[18] などという不穏な“落ち”もある。これは酒に酔った焦大という老執事が口走った，という事になっているが読者にはピンとくる仕掛けになっている。『紅楼夢』の先行作品である『金瓶梅』にも多くの歇後語が用いられており，その点では『金瓶梅』の文体を継承していると言える。

２－３．史湘雲の「鴨頭」

れっきとしたお嬢様なのにお茶目で天真爛漫な史湘雲による，抱腹絶倒酒令。双関語使用。

忽見碗內有半箇鴨頭，遂揀了出來喫腦子。…「這鴨頭不是那丫頭，頭上那討桂花油。」**眾**人越發笑起來，引的一杆人都走過來說:「雲姑娘會開心兒，拿著我們取笑兒，快罰一杯才罷。…倒得每人給一瓶子桂花油擦擦。」（第62回）

ふとお椀のなかに家鴨の頭が半分はいっているのに眼を留めました。そこでこれをはさみ上げて脳味噌のところを食べにかかります。…「この鴨頭，かの丫頭とは品かわり，桂花油を，頭上にもとめんすべもなし」一同はどっとわきました。それに釣られて，（女中たちが）どやどやと押しかけ，「湘雲さま，慰み物になさるにもほどがございます，わたくしどもをつかまえて笑い物になさるとはね。大至急罰杯一杯差し上げていただかないことには，おさまりません。…それならそれで『おつけよ』とみなに一瓶ずつ桂花油をくださいましな」

ここでは「鴨頭（アヒルの頭：椀種として入っている）」と「丫頭（女中・小娘）」とが同音（yātóu）であることから双関語を用いている。しかし，湘雲は自ら酒令のルールを決め（酒面には昔の人の文章から一句，昔の人の詩から一句，骨牌の名から一句，曲牌の名からも一句，それと暦の文句から一句出し，寄せあつめて全体が意味の通るようにすること，酒底には人事に関係のある果物・野菜の名を挙げるのです）みな従っていたにもかかわらず彼女だけふざけて酒令を行なっている。湘雲は実家の居心地こそ多少悪いが，才気煥発で男勝りという人物として描かれている。ここでも普通は多少遠慮すべきところ女中に対して堂々と「丫頭」と言い放っており，彼女の面目躍如たる描写であろう。しかし，かなり酔いが回っていたようで，直後に芍薬の花びらが散りしきる中でうたた寝していたところを発見される。

それにしても，「２－１．若君の教養」にみえる酒令に比べると，彼女らの酒令は凝っているだけでなく直前の林黛玉の酒令は王勃・陸游・礼記・李白などを取り合わせ，見事に仕上げており，貴族家庭の教養が窺える。

２－４．劉ばあさんの農家的酒令

右邊「么四」真好看。　一個蘿蔔一頭蒜。

（女中）「右は14，げに美しゅう」（劉ばあさん）「赤だいこん一本，ニンニク一つ」

湊成便是一枝花。 花兒落了結箇大倭瓜。（第40回）

（女中）「合せりゃ，はい，一枝の花」（劉ばあさん）「花散って，生りも生ったり，大南瓜」

無学な劉ばあさんにやらせた酒令が，農家ならではの野菜シリーズに。直前に酒令を行った薛未亡人（薛宝釵の母）を例に取ると「梅二輪，ひらひらと，風に舞いつつ」「十月（かんなづき），梅の花，高嶺に香る」などのように品のある言葉を選んでいた。それと比較すると劉ばあさんは「赤だいこん，ニンニク」のように，普段接している作物の名が口をついて出てくる。ただし，これは受けを狙ってわざと田舎くさい言葉を使っているのだ。農作物でも詩に用いることのできる作物も無きにしも非ずではあるが（果実・筍・葉物野菜など），よりによって泥臭いものを連発することで，貴族家庭の非日常＝反秩序を形成した。

さらに，「大倭瓜」は「傻瓜（バカ）」を連想させる。日本語にも「土手かぼちゃ」という罵語があり，土手は誰の土地でもないので貧乏人がかぼちゃを植えるが，逆に日当りが良くて育ち過ぎてしまう。土手で育ち過ぎた大きなかぼちゃは割れて使い物にならないことから「どこにでも転がっていて使い物にならないもの」という意味だ。ここでは「南瓜」ではなく「倭瓜」と言っているのでなおさら「倭瓜脳袋（働きの鈍い頭，うすのろ頭）」を思い浮かべてしまい，「これには一同，げらげら笑い出したことでした」と続く。このあたりも宴席に他人が入ったことにより，普段の取りすました上品な酒令が一気に反秩序へなだれて行く様が描写されている。

3．作法について

3－1．茶

寂然飯畢，各有丫鬟用小茶盤捧上茶來。當日林如海教女以惜福養身，云飯後務待飯粒咽盡，過一時再喫茶，方不傷脾胃。…因而接了茶。早見人又捧過漱盂來，黛玉也照様漱了口。盥手畢，又捧上茶來，這方是喫的茶。（第３回）

食事が終わったところで，めいめいの侍女が茶托にのせて茶を運んできました。…（林黛玉の父は）腹におさまったのち，しばらく間をおいて茶を飲むように，…こういって聞かせたものでした。…それで茶も受け取ったのですが，そこへ早くも召使がこんどはうがい茶碗を運んできたものですから，黛玉も見よう見まねで口をすすぐのでした。そして手を洗い終わった時分に，さらに茶を運んできましたが，この方が正真正銘の飲む分の茶というわけでした。

『紅楼夢』は旧名に『石頭記』があるように，宝玉が生まれる際口に含んで生まれたという「通霊宝玉」が語り手である。が，よく視点がぶれ，ここでは林黛玉の視点から描かれている。その中で父から教えられた「茶は飲むもの」という固定観念がくつがえされ，賈府では「食事の直後に口を漱ぐものである」驚きを語っている。実家との作法の違いを実感するとともに貴族の力を感じているシーン。林黛玉はこの第３回で初めて賈府に来たこともあり，まだ客人扱いであった。

対照的に賈宝玉の女中 晴雯が病を得て里帰りした際，見舞った宝玉はその家の茶を描写して「赤味がかかっていて，これまたどう見ても茶とはいえぬ代物…香りもなければ茶の味もせず，やけに苦いばかりで，そこがわずかに茶らしいというだけのこと。」（第77回）[19] と言っている。下々の家庭ではランクの低い，宝玉が首をひねるような茶しかないこと，晴雯が「それがお茶なのでございますから。そんな，お屋敷のお茶のことを思っていらしたら，大違い。」と説明するものの，読者は宝玉と一緒に晴雯の身の上を同情する。

茶は小説の中では小道具に過ぎないが，作法・身分の違いを際立たせるのに大変効果的に使われている。

3－2．箸

「這會子又把那箇**筷**子拿了出來，又不請客擺大筵席。」…忙收了過去，也照樣換上一雙烏木鑲銀的。劉姥姥道，「去了金的，又是銀的」…「菜裡若有毒，這銀子下去了就試的出來。」…「這箇菜裡若有毒，俺們那菜都成了砒霜了。那怕毒死了也要喫盡了。」（第40回）

（賈母：賈家のお祖母様）「だれだえ，こんなときにまたそんな箸（年代物の金象嵌の細工をした象牙の角箸）を持ち出したりしたのは？」…あわててこれを納いこみ，婆さんにもきまりどおり銀象嵌をした黒檀の箸一膳に取り換えてやりました。「はて，金のを召しあげられて，こんどは銀のでございますか。…」「お料理に万一毒が入れてあるときには，この銀のを入れたらすぐためせるのですよ」…「このご馳走に毒がはいっておるちゅうことになりますると，わたくしどものなんぞは，砒素の塊ってえことになっちまいますわい。なあに，たとい毒で死のうと，ご馳走さえ平らげたら本望でございますよ。」

このシーンは「1－1．貴族の宴席料理「ハトの卵」」の続きである。ハトの卵が「見るだけ」だと知らない劉ばあさんは，あらかじめ重くて使いづらい金の箸をあてがわれていた。その結果コロコロ転げまわして一同の座興とされてしまったのである。そこで見かねた賈母が銀の箸に取り換えさせた。

劉ばあさんが言っているように，たかが箸にも貴族家庭では贅を尽くしている。金銀の象嵌細工が施してあり，しかも毒見のために銀を使っているのだと説明している。それに比べて劉ばあさんは「ご馳走さえ平らげたら本望だ」と本音を交えたユーモラスな返事をしている。実際に農家の食事では毒を盛るなどということは想定しにくい。貴族でこそ家庭内であっても毒を盛られる可能性を考えなければならないことを示唆している。

さらに，ここで注目すべきは劉ばあさんの自称が「俺們（おれたち）」であることだ。劉ばあさんは一貫して「我」を使っていたのだが，自分が座興に使われていることを自覚したのか，あるいは場の雰囲気に慣れてきたのか，つい地が出て田舎くさい「俺們（おれたち）」が口をついて出た。作者の繊細な描写が表われている。

4．対照分析：日常食事場面

1～3では宴席での表現を取り上げたが，本項では日常の食事風景を2例挙げて宴席シーンとの対照分析としたい。

4－1．王熙鳳

聽得那邊說了聲「擺飯」，漸漸的人才散出，只有伺候端菜的幾個人。半日鴉雀不聞之後，…**桌**上碗盤森列，仍是滿滿的魚肉在內，不過略動了幾樣。（第6回）

やがてあちらでは「お膳の用意」と声がかかり，おおぜいの人もそれを合図のように順々にさがっていって，あとには料理をとり分ける給仕役のいくたりかが残っただけのようでした。しばらくはひっそりと物音一つしません。…卓上には皿小鉢がずらり並び，なかには魚肉の類が山盛りのままで，ほんの2・3品しか手がつけられてないふう。

王熙鳳は一族揃っての食事や宴席では率先して取り持ち，面白い話しをしたり気転を聞かせたりする一種のスターであるが，日常の食事は例に挙げたように決して賑やかで楽しくはないようである。「鴉雀不聞（烏雀の声もしないほどひっそりと）」と形容されているように，配膳の女中に話しかけることもなく，「森列」（いかめしく，おごそかに並ぶ）する料理には少ししか箸をつけていない様子も見てとれる。すなわち，彼女が宴席などで見せる陽気さは外向きの顔であったということと，平素は元気溌剌である彼女が小食であることがこの描写によって分かる。

作者は日常の寂しい食事風景を読者に見せる

ことによって，宴席などの外向きでの陽気さを強調した。

4－2．賈宝玉

卻等不得，只拿茶泡了一碗飯，就着雞瓜虀忙忙的咽完了。（第49回）

もう待ちきれず，ご飯を一膳お茶漬けにして，そのなかへ雉の脚の肉のフリカケをぶちこみ，さらさらと流し込みました。

この前段で宝玉はお祖母様から「今日はとれたての鹿の肉が出るはずだから，おまえたちはそれが出てから食べるとするのだね。」といわれた。それにもかかわらず，詩会を計画していた宝玉は空腹しのぎにお茶漬けを流しこみ，遠いご馳走より近くのお茶漬けをいとわない，質素さを見せている。その中で「野雞瓜虀」が「雉の脚の肉のフリカケ」とある[20]が，この訳だと原文は「瓜」ではなく「爪」でなければならない。私はむしろ「瓜虀」を「ウリの漬物」と解釈し，「雉肉やウリの漬物」とした方がお茶漬けのトッピングとして良いように思う。《紅楼梦饮食谱》でも「瓜」と解釈している。[21]ウリの漬物はいかにも日常的な箸休めという感じがして，空腹を満たすためにお茶漬けを「さらさらと流し込む」にはぴったりだ。

以上，王熙鳳と賈宝玉の日常食を例として見たが，いずれも宴席とは異なりひっそりと質素で面白おかしい言動のない食事シーンである。

おわりに

本稿では『紅楼夢』の文体的特徴を宴席表現からアプローチを試みた。そこから得られた結論は，以下の点に集約されよう。

・宴席での会話や酒令は酔うに従い本音が出てくるものであり，それぞれの人物形象が強調されている。例えば，劉ばあさんは農家らしい言葉使いで振る舞いも上品から遠くなっている。それを諷刺する林黛玉の毒舌も鮮やかだ。馬鹿君 薛蟠はこれ以上不可能なレベルの猥語を弄し，史湘雲は正真正銘のお譲さまであるのに男勝り天真爛漫さが，酔うに従い顕著になって女中に向かって「丫头」を連発する。これは例えて言うと「バカにバカという」たぐいで，普通のお嬢さまは決して口にしないであろう言いぐさだ。挙句の果てに芍薬の花の下でまどろんでしまう。

・宴席は華やかな「ハレ」の席なので，楽しませようと受けを狙おうという方向に行きがちである。その顕著な例が王熙鳳の口八丁であるが，これは外向きの顔であることが日常のひっそりとした食事風景からも見てとれる。

・親密感を演出するために露悪的ともいえるほど「下ネタ」を連発する。ハトの卵は「肏蛋（どじをふむ・だめになる・バカ）」を連想すると同時に，繁殖力が旺盛で鳴き声も「勃勃（bóbó）」というらしく[22]，年少者には参加しにくい会話であるようだ。同様に，表面的には茄子料理の味や作り方を語っているようだが，これもきわどい会話である可能性がある。

・登場人物のキャラクターを際立たせるため，描写が細かい。無礼講とみせかけてあてこする，ついうっかりと地を出して「俺們」と言う，などがそうだ。また，茶の飲み方一つ取っても作法・身分の相違が描かれており，読者は微細な視点を作者と共有することができる。

さらに，「1．宴席料理をめぐって」で取り上げた「ハトの卵」は「見たこともないもの」の例であり，逆に「茄子の料理」は「普段収穫し食材としてありふれたもの」なのに調理法が「聞いたことのないもの」の例である。いずれも食品の過剰消費[23]という点においては貴族の宴席ならではの料理である。

以上を総括すると，『紅楼夢』の宴席表現は双関語や歇後語の使用・暗喩の多用に特徴があり，罵語を含むいわゆる「汚い言葉遣い」を積極的に使用している。その理由は「はじめに」で述べたように宴席に他人が入ることによる反

秩序の表現であると考えられる。

なお本稿は，2011年６月18日に日本大学理工学部で開催された日本文体論学会50周年（第99回大会）シンポジウム「私の考える文体」で発表したものに，加筆修正した。

参考文献

資料　『紅楼夢』に見える宴席（池間里代子）

回　数	日　付	内　容	エピソード
第１回	８月15日	中秋節	甄士隠と賈雨村の宴会
第４回	５月末	歓迎会	薛未亡人上京
第５回	早春	梅の花見	賈宝玉が秦可卿の部屋で昼寝
第５回	２月	太虚幻境	警幻仙姑主催の宴会
第７回	初冬	尤氏主催	秦鐘と賈宝玉初対面
第10回	12月２日	賈敬誕生日	秦可卿病気
第11回	12月２日	賈敬誕生日	秦可卿病気
第16回	冬	賈政誕生日	元春貴妃に
第16回		薛蟠婚礼	香菱
第17・18回	１月15日	元春帰親	元春歓迎宴
第22回	２月21日	宝釵誕生会	
第22回	２月22日	灯謎	元春
第25回	３月	王子騰夫人誕生日	賈環焼餅
第26回	４月25日	薛蟠誕生日	馮紫英宴会に参加
第27回	４月26日	芒種節	紅玉の活躍
第28回	４月27日	馮紫英の宴会	酒令
第29回	５月１日	朔日	金麒麟入手
第29回	５月３日	薛蟠誕生日	賈宝玉・林黛玉いさかい
第30回	５月５日	端午節	賈宝玉，襲人を足蹴に
第31回	５月５日	端午節	賈宝玉，晴**雯**と口論
第31回	５月５日	薛蟠の宴会	晴**雯**，扇を裂く
第36回	５月	薛未亡人誕生会	
第37回	８月20日	賈政送別	詩社・発足
第38回	８月22日	木犀花見	詩社・蟹宴
第40回	８月25日	大観園	劉ばあさん
第40回	８月25日	大観園	酒令
第43回	８月27日	王熙鳳誕生会	金釧児追悼
第45回	９月14日	頼大家宴	柳湘蓮，薛蟠を殴る
第48回	10月	番頭宿下がり	香菱詩を作る
第49回	10月16日	宝琴ら歓迎会	雪降る
第49回	10月17日	詩会	鹿肉
第52回	10月23日	王子騰誕生会	雀金**呢**

第53回	1月1日	正月祝宴	
第53回	1月1日	正月祝宴	
第53回	1月15日	元宵節	子供芝居
第54回	1月18～22日	正月祝宴	18日～22日まで他家
第57回	2月	甄家送別	紫鵑の作り話
第57回	2月	薛未亡人誕生会	薛蝌と邢岫烟の婚約
第62回	4月	宝玉・宝琴誕生会	湘雲酔う
第63回	4月	宝玉誕生会	花占い
第63回	4月	平児返礼	賈敬死去
第65回	6月2日	賈璉婚礼	尤二姐
第65回	6月	尤三姐縁談	
第67回	8月	薛蟠の宴会	柳湘蓮出家の噂
第69回	12月	賈璉帰還祝い	秋桐を賜わる
第70回	3月3日	探春誕生会	
第70回	3月5日	詩社	
第71回	8月3日	史太君誕生会	80歳
第75回	8月	賈蓉と取り巻きの宴会	
第75回	8月14日	賈珍中秋節	
第75回	8月15日	史太君中秋節	酒令
第75回	8月	賈蓉，公達と連日宴会	
第79回	8月	薛蟠婚礼	夏金桂
第83回		元春見舞	御所
第85回		北静王祝宴	宝玉縁談
第85回	2月	賈政昇進祝・黛玉誕生会	薛蟠事件
第92回	11月1日	消寒会	宝玉，巧姐に講釈
第92回		馮紫英	雨村の噂
第93回		臨安伯宴会	宝玉，蔣玉函に再会
第93回	11月	賈芹水月庵で宴会	
第94回	11月	海棠の花見	通霊宝玉失せる
第96回	1月15日	元宵節	王子騰急逝
第99回	2月	宝玉挙式	宝釵
第100回		張徳輝誕生会	薛蝌，夏金桂にからまれる
第101回		王子勝誕生会	王熙鳳，夫婦喧嘩
第102回		探春嫁ぎ先祝宴	賈政弾劾される
第104回	冬	賈政帰宅内祝い	
第104回	冬	賈政帰宅祝い	家宅捜査
第105回	冬	賈政帰宅内祝い	家宅捜査
第108回	2月21日	宝釵誕生会	酒令
第117回		賈芸・賈薔の持ち回り宴会	
第117回		邢叔父・王仁の宴会	巧姐についての謀議
第119回		科挙合格祝い	宝玉失踪
第120回		甄士隠と賈雨村の宴会	

魚返善雄『言語と文体』紀伊国屋新書　1974年版
三浦敏明「R.Lスティーブンソン『宝島』の文体」(1)(2)
東洋大学文学部紀要第59・60集　2006年・2007年
周汝昌《红楼梦辞典》广东人民出版社 1987年
吴竟存 编《红楼梦的语言》北京语言学院出版社 1996年

注

1）《红楼梦》研究 1983年《安顺师专学报》より転載
2）月刊「しにか」大修館書店　1992年１月号
3）二松学舎大学東洋学研究所集刊28　1998年
4）池上嘉彦『文化記号論』講談社学術文庫　2003年 p.232
5）伊藤漱平『紅楼夢』上　平凡社　1973年　p.238
6）ハトの卵については，池間「小説『紅楼夢』にみえる鳥についての考察」流通経済大学論集Vol.45, No.1, 2010.7　p.19　参照。
7）『人民文学出版社』（庚辰本）上p.163によれば「肏」ではなく「臊（なまぐさい）」になっているが，文脈からすると「肏」の方が適っている。訳は伊藤漱平（上）p.158
8）伊藤漱平（上）p.201
9）伊藤漱平（中）p.36
10）伊藤漱平（中）p.77
11）伊藤漱平（中）p.563
12）伊藤漱平は戚本を底本としているので「茄胙」となっているが，人民文学出版社（庚辰本）を始め他の版本では「茄鯗」に作る。なお，伊藤は注で「胙はひもろぎ（神に供えたお下がり肉）の意であるから，あるいは脯（ひもの）に作るべきか。」と言っている。
13）伊藤漱平（中）p.5
14）篠田統『中国食物史』柴田書店　1949年　p.295　篠田訳。篠田は1926年，上海で購入した商務印書館本に拠っている。
15）「ボケ茄子」は色目が薄く，キリッとしていない意。「おたんこ茄子」は「できそこないの茄子」あるいは廓言葉「おたんちん（御短ちん＝男根）」からの転用という説があるが未詳。
16）伊藤漱平（中）p.6
17）王敏・梅本重一『中国シンボルイメージ図典』東京堂出版　2003年　p.10
18）人民文学出版社（上）第７回　p.114／伊藤漱平（上）p.107
19）伊藤漱平（中）p.604
20）伊藤漱平（中）p.126
21）秦一民《红楼梦饮食谱》山东画报出版社　2004年 p.122
22）池間里代子「小説『紅楼夢』にみえる鳥についての考察」流通経済大学論集Vol.45, No.1, 2010.7　p.19
23）前掲書．池上嘉彦　p.220